元住吉山遺跡発掘調査概要

1976

神戸市教育委員会

目　　次

a．位置と環境…… 3
b．調査概要…… 4

第１図　元住吉山遺跡および周辺の弥生遺跡… 2
第２図　元住吉山遺跡遺構配置図……12
第１表　元住吉山遺跡周辺の弥生遺跡一覧…… 3
第２表　遺構内出土遺物一覧…… 5

図版　(1)　遺跡遠景〈南から〉…… 7
(2)　遺跡遠景〈北から〉…… 7
(3)　発掘区全景〈西から〉…… 8
(4)　第１・２ピット全景〈西から〉…… 8
(5)　第１ピット弥生土器出土状態〈南から〉 9
(6)　第１ピット全景〈北から〉…… 9
(7)　第１・２ピット全景〈東から〉…… 10
(8)　第12ピット全景〈東から〉…… 10
(9)　第８・９ピット全景〈西から〉…… 11
(10　第８・９ピット全景〈東から〉…… 11

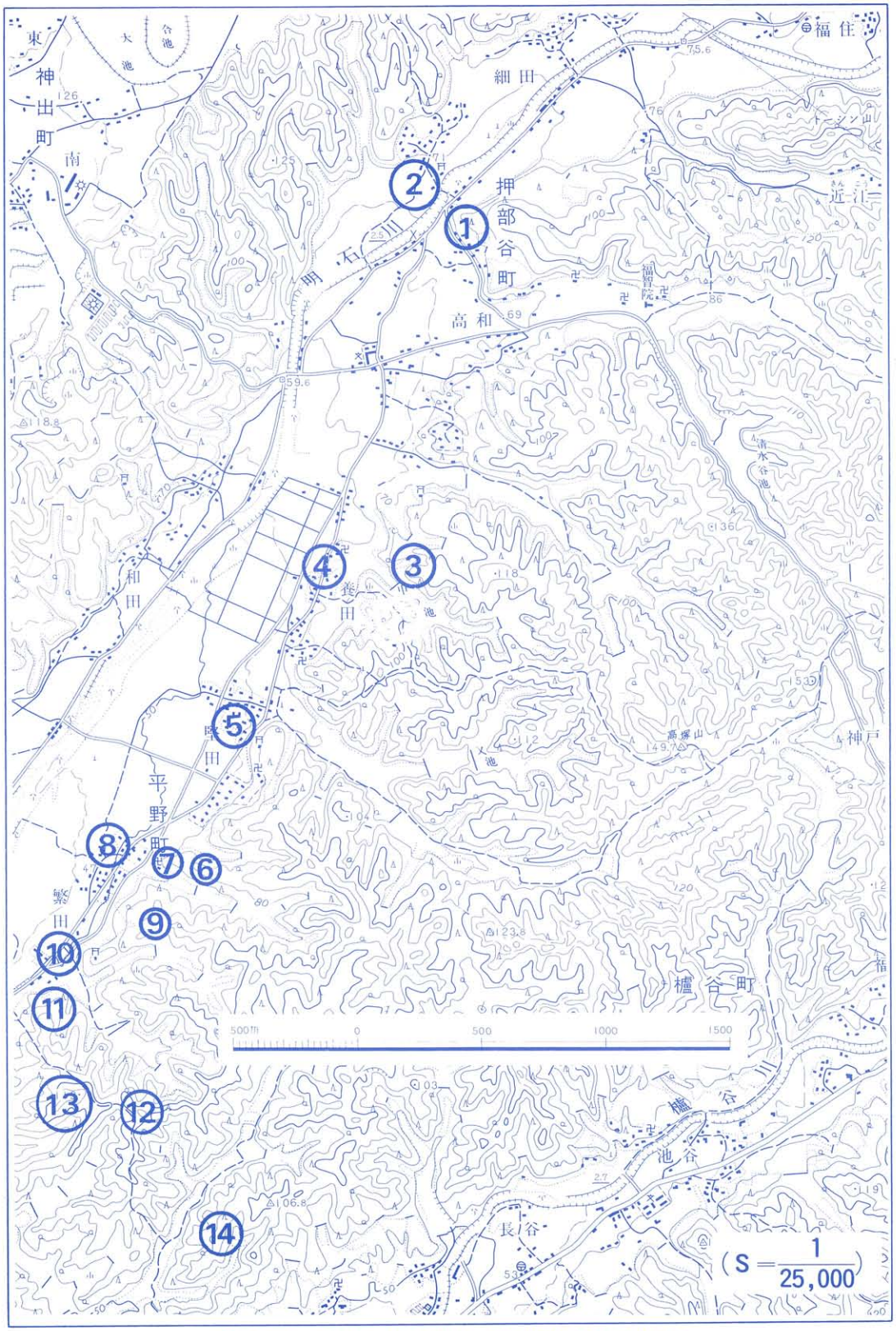
〈例　言〉

本書は、神戸市教育委員会が、神戸市土木局の依頼を受けて実施した一般県道志染平野線道路改良工事にともなう神戸市垂水区押部谷町細田、元住吉山遺跡の埋蔵文化財確認調査に関する概要である。

調査は、神戸女子商業高等学校教諭河野通哉氏を団長とし、神戸市教育委員会文化課学芸員中村善則を現場主任として、昭和50年９月29日より10月25日まで実施した。

〈発掘調査参加者〉

赤松啓介・河野通哉・喜谷美宣
奥田啓通・浅岡俊夫・宮本郁雄
中村善則・丸山　潔・真野　修



第１図．元住吉山遺跡および周辺の弥生遺跡

元住吉山遺跡発掘調査概要

a．位置と環境

播磨平野の東端を流れる明石川は、藍那付近に源を発し、山間部を西流し、しだいに流れを南に変えながら、中流部では洪積丘陵を浸蝕しながら狭い谷平野を形成している。さらに下流域ではいくつかの支流を合して河口付近に沖積平野を形成する。

明石川流域では、縄文時代の遺跡は少く、中流部の元住吉山遺跡、下流域の片山遺跡、支流の伊川流域の南別府遺跡（いずれも後期）などが知られているが、いずれも規模の小さい遺跡ばかりである。

弥生時代に入ると、下流域の吉田遺跡・片山遺跡など前期の遺跡から後期にいたるまで遺跡は豊富になる。

中流域では第１図および第１表の如く中期後半から後期にかけての遺跡が多く、特に西神ニュータウン内の遺跡は最近の調査で、その内容が明らかになりつつある。

〈第１表．元住吉山遺跡周辺の弥生遺跡一覧〉

	遺跡名	所在地	時期 IV	時期 V	立地・標高	遺構・遺物
1	元住吉山	神戸市垂水区押部谷町細田	―	―	洪積段丘中位 82m	土拡群・石鏃
2	細田	〃 〃		―	緩扇状地性低地 70m	
3	養田（トンの辻）	〃 養田	―		丘陵 90m	竪穴住居・土拡・銅剣形石剣・石鏃・石錐・石鍾・砥石
4	養田	〃	- - -	―	緩扇状地性低地 58m	竪穴住居・溝・石鏃・石斧
5	堅田	平野町堅田	―	―	緩扇状地性低地 55m	
6	西神38地点	〃 繁田	―		丘陵 70m	
7	西神40地点	〃 〃	―		丘陵 65m	方形台状墓(2)
8	繁田	〃 〃	―	―	扇状地 48m	石斧
9	西神42地点	〃 〃	―		丘陵 80m	壺棺
10	繁田南	〃 〃	―		扇状地 50m	溝
11	西神47地点	〃 〃	―		丘陵 70m	土拡墓
12	西神48地点	〃 大畑	―		丘陵 110m	竪穴住居
13	西神50～52地点	〃 〃	―		丘陵 80～110m	竪穴住居・石鏃・石斧・石錐・砥石
14	西神65地点	枦谷町栃木	―		丘陵 90m	竪穴住居・石鏃

b．調査概要

調査地点は神戸市垂水区押部谷町細田字平野1176—22および1176—29に属し山塊が、南東から、北西へ細く、平野部へ突出した部分の尖端部である。この突出部の頂上は標高82mあまりでかなり、広面積の平坦部となっている。

調査地点より南側は、明石川によって形成された平野が拡がり、北側は至近距離に雄岡山があり、押部谷の奥深く望むことができる。このような地形から考えて、発掘調査開始前より、この平坦部には何らかの遺跡が存在しているものと思われた。また、尖端部南西麓部には、かつて、直良信夫氏によって報告された元住吉山遺跡（縄文時代後期・弥生時代）が存在していた。（註１）

調査の結果、縄文時代の遺構は発見されなかったものの、頂上平坦部より弥生時代中期から後期にかけての土拡墓と考えられる遺構が検出された。

調査は尾根の頂上平坦部および南西斜面を中心に行ったが、南西斜面は傾斜が、きつく、当初より遺構が存在する可能性は少ないと考えられていた。トレンチを設定した結果では、表土直下が地山の流出土または岩盤で、遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。

頂上平坦部では第２図のように地山および流土を切りこんだ落ちこみが、12～14ケ所検出された。各落ちこみともに、埋土は有機質を含んだ黒色土であった。

各落ちこみより出土した遺物については第２表に示したが、それ以外にも、P_{12} の東部で礫層（地山）上に遺物包含層（厚さ10～20cm程度）があり、若干の弥生土器片、サヌカイトフレーク、石鏃（１点）が出土した。

上記の落ちこみの性格については、P_3・P_7・P_8・P_{11}・P_{12}が弥生時代の土拡墓であろうと考えられる他は不明である。しかし、いずれにしても弥生時代の何らかの遺構であることはまち

がいないであろう。

今度の調査によって尾根の頂上平坦部が遺跡であることは明らかになった。したがって発掘区域の南東に広がる平坦部も遺跡である可能性が大きく、しかも、その広がりからみてその部分が遺跡の中心であり広大な遺跡である可能性もある。したがって今回発掘した遺構群は遺跡の東北端部にあたると推定される。（中村善則）

註１　直良信夫「播磨国押部谷村元住吉山の遺跡に就て（予報）」
『人類学雑読』第43巻第５号　1928年
直良信夫「兵庫県下に於ける二つの石器時代に就て」
『人類学雑誌』第44巻第２号　1929年

〈第２表．遺構内出土遺物一覧〉

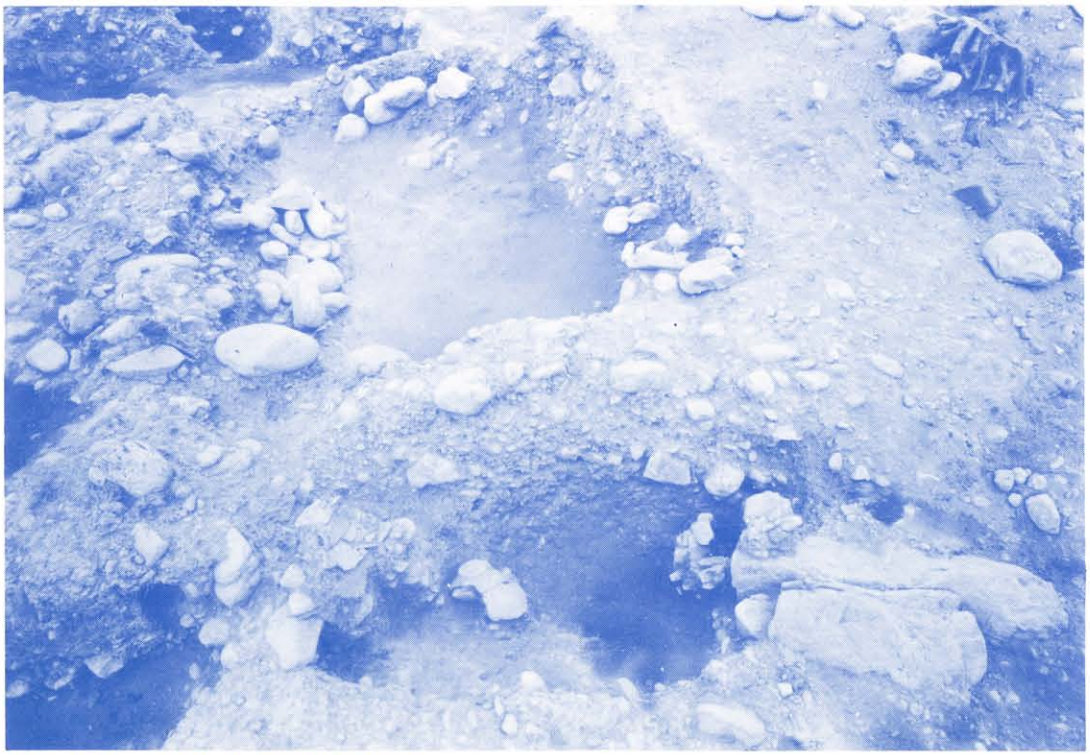
ピット名	出土遺物名	時代	備考
P_1	壺、甕、サヌカイトフレーク	弥生時代Ⅳ様式	壺はほぼ１個体分
P_2	石鏃・土器片・サヌカイトフレーク	弥生時代	
P_3	な　し	弥生時代	
P_4	〃		
P_5	サヌカイトフレーク		
P_6	な　し		
P_7	な　し		
P_8	土器片・サヌカイトフレーク	弥生時代	
P_9	な　し		
R_0	な　し		
R_1	長頸壺、サヌカイトフレーク	弥生時代Ⅴ様式	壺片はR_1の南側にあった。
R_2	壺	弥生時代Ⅲ様式	

その他出土遺物……弥生土器片、石鏃、サヌカイトフレーク

（１）遺跡遠景〈南から〉

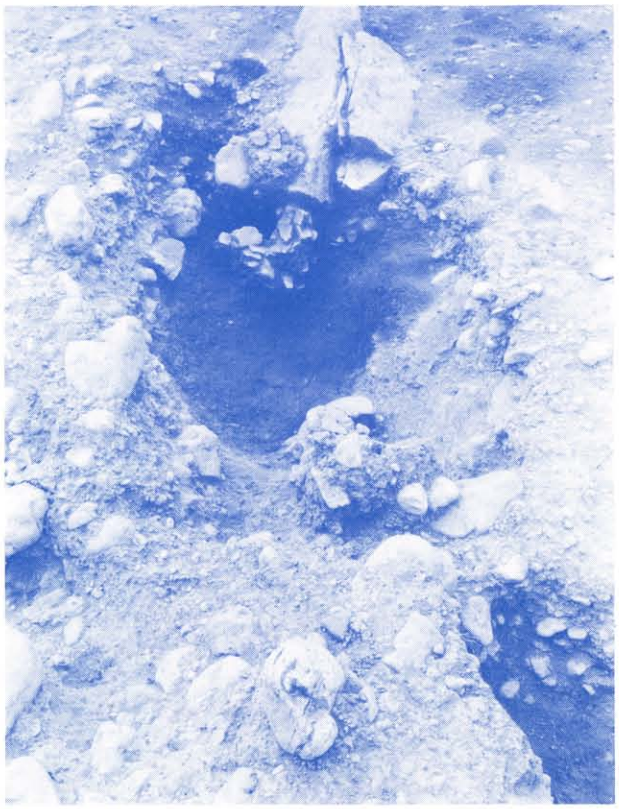
（２）遺跡遠景〈北から〉

（３）発掘区全景〈西から〉



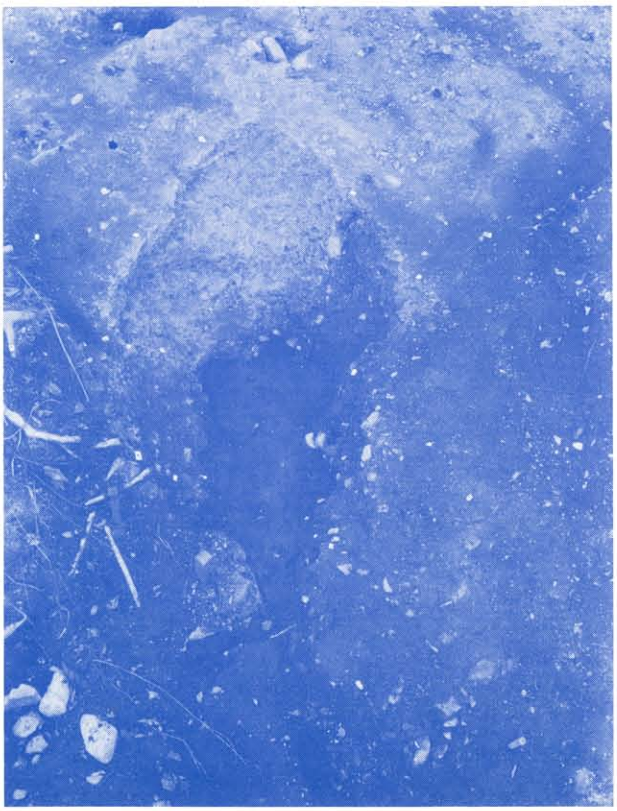
（４）第１・２ピット全景〈西から〉

(5) 第1ピット　弥生土器出土状態〈南から〉



(6) 第1ピット全景〈北から〉

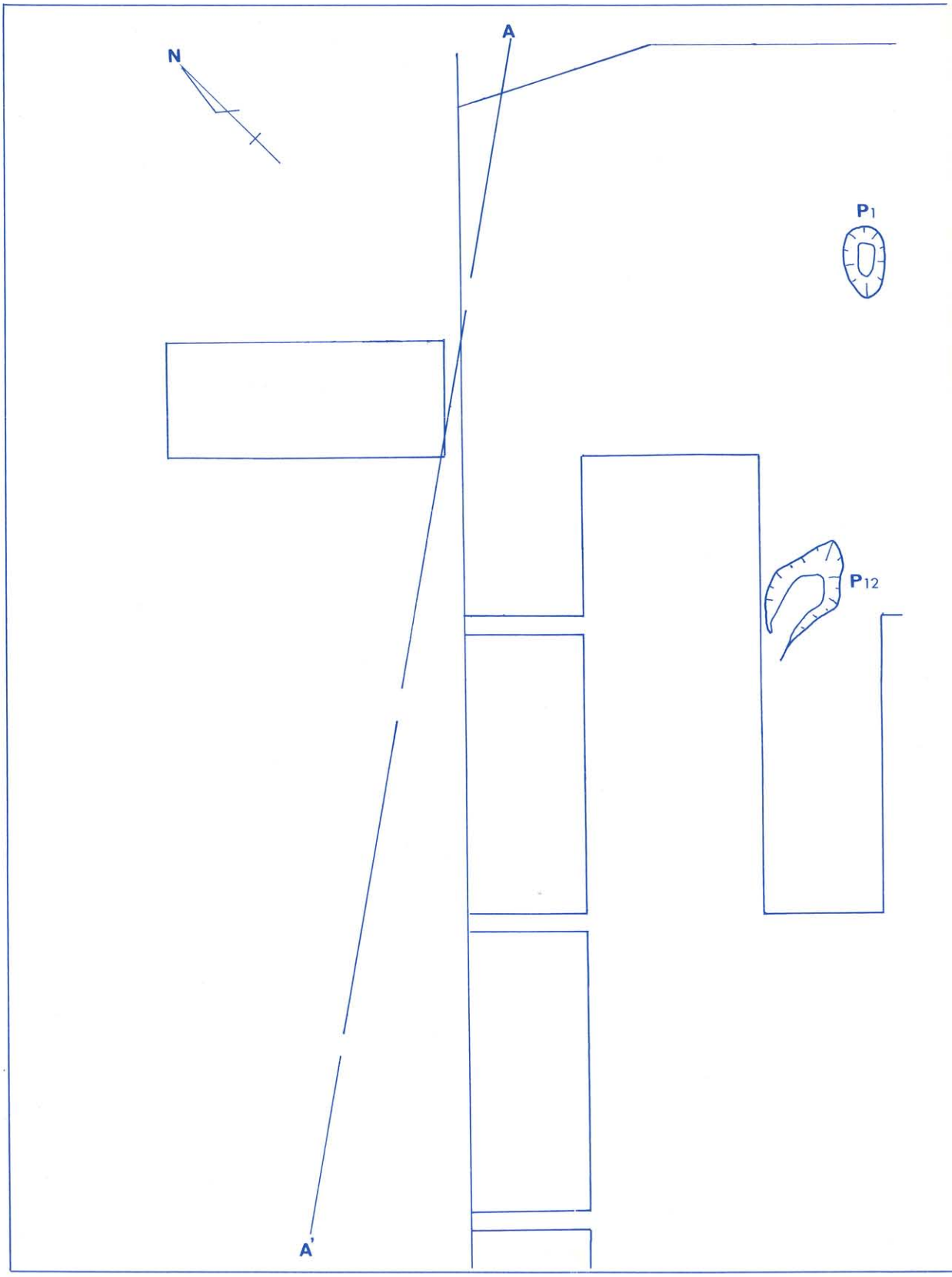
(7) 第1・2ピット全景〈東から〉

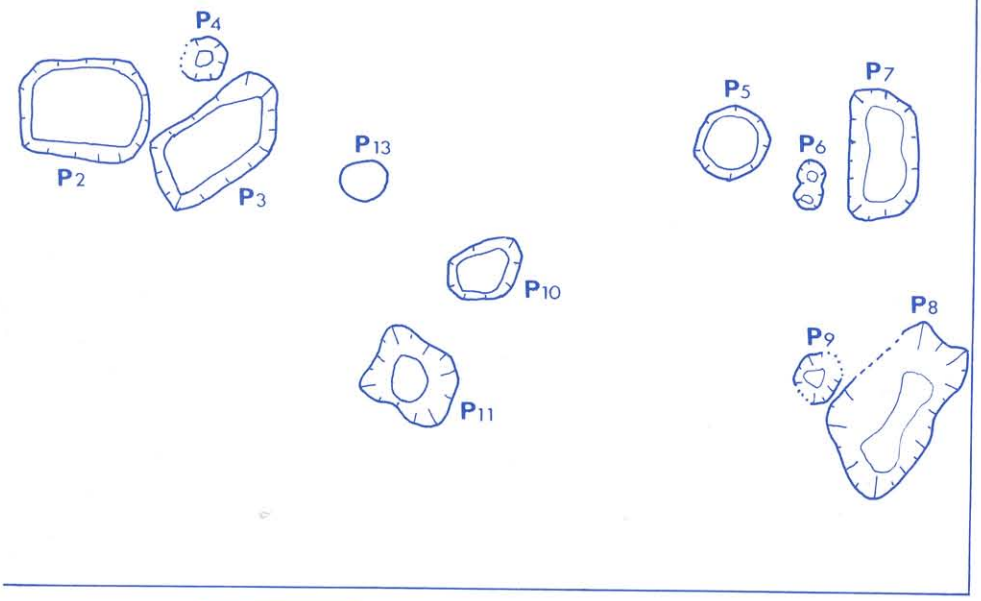


(8) 第12ピット全景〈東から〉

（9）第8・9ピット全景〈西から〉

（10）第8・9ピット全景〈東から〉


N
A
A'
P1
P12



第2図. 元住吉山遺跡遺構配置図　　A－A′は道路中心線　　$(S=\frac{1}{100})$

元住吉山遺跡発掘調査概要

編集
発行　神戸市教育委員会 文化課

発行日　1976年3月1日

印刷　清水印刷所